
戦争と人類の共生

堯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争と人類の共生

【Nコード】

N2759D

【作者名】

堯

【あらすじ】

2009年、憲法第9条削除。これが全ての始まりだった。第三次世界大戦。言葉で言えば簡単だが、中身は複雑だ。世界情勢、科学、人事、これらが過去にない例ばかりだった。主人公、泊弘忠は、中2ながらに軍人となる。兵器の1つとして…

IC革命

IC革命

2009年4月、国民投票により憲法第9条削除。

同年12月、ロシア、日本の憲法第9条削除により危機感を抱いた軍事関係者の上層部が、クーデターを起こし、現政府軍と軍事政府軍が激突。結果、軍事政府軍が勝利し、政権獲得。これにより世界が第3次世界大戦を予測する。

2010年、2月、ロシア、日本と対立する北朝鮮を支援。「冷戦時代に戻った」と、世界の人々は悲観する。

同年9月、CIS（独立国家共同体）はアメリカと同盟を組むことを考えるがアメリカは拒否。

2010年に起こったIC革命により、より優れたPCを安く大量生産することが可能となった。超小型の物体に1EBの情報を書き込むことが、ごく普通の世界になった。そして最終的には、人の脳に情報を移植すること、すべての物体に情報を移植することさえ可能となった。

人の脳に情報を移植すること。例えば、円周率の2000億桁の情報を人間の脳に移植すると、完璧にそれを覚えているということになる。

木に情報を移植すること。例えば、いままではDVDとか、CDとかに情報を書き込み、そこから情報を読み取るというものだったが、DVやCDではなく、ただの木のかけらで代用が可能となる。

このようなIC革命が起こったと同時に、人間の脳は飛躍的に発達した。情報を脳に移植できるためである。元の情報さえあれば、普通の小学生でも一流の科学者になることができる。

だが、人間の脳に情報を移植するというのはコストがかかるため、実用性は極めて低かった。ただ唯一、木や鉄などの無生物に情報を移植するコストはかからないものだった。

このIC革命が土台となり、人類は他の分野でも大きな業績を残した。毎日、明日にはなんの研究が業績を残すかが楽しみな社会となった。

このように人類の科学は飛躍的に発達したが、人類の性格までは変えることはできなかった。発達するにつれて、人の心は貧しくなっていく。

そして外交もまだ以前と変わらなかった。現在の日本は、いまだに国連の常任理事国になれず、北朝鮮との問題も解決していない。他にもいろいろあるが、主な問題はこの2つだ。

2005年にできたG4（常任理事国に加入申請した、日本、ドイツ、インド、ブラジル）

のなかで、常任理事国に加入していないのは、日本だけである。

日本はいまだに発展途上国に多大な支援を行っているにも関わらず、国連はそれを無視してドイツとインドとブラジルを常任理事国入りさせた。

しかし日本のやったことは無駄ではなかった。今は昔、発展途上国と呼ばれていた国も、先進国となり、目覚しい発展を遂げているのである。

日本はIC革命からアメリカを凌ぐ経済力となった。IC革命を起こしたのが日本であったからだ。今の日本は、世界を支える国となっていた。だが、これが皮肉にも常任理事国に入れない要因の1つとなった。アメリカがこれに嫉妬し、拒否し続けたためだ。

日米安全保障条約にもひびがはいり、もはや効力をなくしたものとなった。アメリカ軍は日本から総引き上げ、在日米軍は存在しなくなった。

一方中国とは親交が深まった。お互いの関税はかけず、自国のことより相手国のことを考える仲となった。

アメリカが日本から消えたため、日本は軍事力の強化に努めた。2009年に憲法9条も削除され、いまは戦争可能な立場に変わった。日本の軍事力はIC革命と憲法第9条の削除により、異様なものとなった。軍事力の総力では、アメリカに劣るが、技術力は世界一となった。日本は各種兵器の改良に努め、軍事力の増強を急いだ。これにはわけがある。北朝鮮の核ミサイルも原因の1つだが、それよりもロシアが危険だった。ロシアは北朝鮮に、兵器の設計図、資金、物資を提供していた。今、日本と北朝鮮は敵対するなか、ロシアは北朝鮮を支援した。ロシアは昔から核保有量は世界一で、軍事力はアメリカに次いで3位。ちなみに今、各国の兵力の順位は、1位中国、2位アメリカ、3位ロシア、4位北朝鮮、5位インド、となっている。そして日本は20位である。だが今の時代の軍事力はもはや兵の数ではなくなった。技術、兵器の保有量によって戦局が左右される。日本のIC革命の土台は、その分野でも役に立った。技術面ではアメリカを凌いでいる……

そして、拉致問題も解決されていない。それどころか先進国各国は北朝鮮の核保有を認め、

国交を開いた。もはや拉致問題と核問題は、日本と北朝鮮の間だけとなった。

そして今、2012年となる。

これから始まる第3次世界大戦。この大戦は第1次世界大戦、第2次世界大戦と違い、ヨーロッパではなくアジア大陸が主戦場となる。

この話では、泊弘忠という中学生が主人公となる。彼はとりあえず万能と言えよう。成績は優秀で、スポーツ面ではテニスの県大会1位の實力を持つ。クラスのリリーダ格で、先生からも好まれる真面目さ。誰もが彼に憧れた……

しかし、その万能な能力があっても、戦場では何の役にも立たない。弘忠はその戦場を駆け回ることになる……

同じ日の始まり

今日もいつもと同じように、弘忠は朝5時に起床して新聞を読んでいる。

日常生活は毎日同じなのに、新聞の世界では毎日変わった事件が起きている。こんな退屈な日常から離れて新聞の世界に入りたいと、泊は日頃から思っていた。

リビングでこたつに入り、おっさんのように新聞を開いて朝食を待つ。

今日の新聞の見出しには、「アメリカとの国交回復」と書いてあった。在日米軍が消えてから日本とアメリカの不仲は今日まで続いたが、日本がアメリカにサンプルを渡すことで解決した。そのサンプルとは、日本が起こしたIC革命によって生まれた技術。それも無生物に情報を移植する技術をアメリカに伝授したのである。新聞に写っているアメリカ大統領は大変な笑顔だった。アメリカが日本を追い越す技術を開発するチャンスを得たからという理由しかないだろう。大統領は、「日本との関係をより強めたい。なにか問題があれば是非とも力になりたい」と語っている。

「かあさんまだあ？」

泊が食事を催促する。すると台所から返事が聞こえる。

「もお、ちよつとは待ちなさい。できるまで外を散歩したら！？」

「・・・こんな真つ暗なのに・・・」

今は12月。外の世界ではクリスマス騒ぎになっている。どこの店にもクリスマスツリーを飾って愉快な曲が聞こえてくる季節である。泊の家にも1本のクリスマスツリーが飾っており、夜はピカピカ光っている。ほんと楽しい気分になり、特別な温もりを感じる月である。

しかし日本という国家単位では、温もりを感じることはできない。北朝鮮との問題も残っているし、最近ではロシアも軍事力を強めて

いるという噂もある。泊は一瞬にしてこんなことを考えた。

20分ほどで食卓に朝食が並べられた。

「遅いよ。あと30分しかないじゃん。」

彼の家から学校まで、1時間近くかかる。それでも8時20分に始まる学校には十分に間に合うのだが、7時には学校にいないと彼は気がすまない。

彼は朝食を終えて、家を出た。バス停まで歩く途中、上空に5機編成の編隊が見えた。

一系乱れぬ隊形は、彼の視界から消えるまでずっと続いていた。戦争の時にはこのような隊形を保たなくてはいけないものなのか？

彼はそう疑問を抱いた。現在、日本の戦闘機は2000機に増えていた。そしてそれらの機体は他のどの国からも影響されずに作った、日本だけの戦闘機だ。日本の最新鋭戦闘機、

その名は「F/A43 フェニックス」である。艦上戦闘攻撃機で、攻撃機としても用いることができる。ステルス機でもあり、レーダーが格段に他の機体に勝っているが、コストが高いため経済に余裕がある国しか作れない。日本は今、それが可能となっている。

日本は技術の面でもアメリカに勝っている。そして日本のIC革命による情報移植で、日本人の頭脳は、他の人間より優れていることになる。そして、経済力により大量生産が可能。

第2次世界大戦時の、日本の兵士、アメリカの技術、ドイツの作戦、ソ連の物量を併せ持てば世界一の軍隊が作れる。そして今の日本は、技術、物量、作戦、この3つを手に入れたが、過去に日本が持っていたものは、今の日本は持っていない。

彼はこの話を、クラスメイトの1人、高田清志に聞かされた話だ。高田清志は普通ではない。成績は中の下、身体能力は下の下だ。しかし彼の頭脳はずば抜けていた。成績が悪いのはただ単に勉強しなだけで、彼の頭の回転は怖いものだ。

口が達者で、容赦ない。容赦ないというのは、日常生活上の冗談を、まともに実行するのだ。例えば、「カッターをなげるぞ」と彼が言

えば、本当に顔をめがけて投げるのだ。

口が達者というのはとても恐ろしい。彼の嫌味はどの嫌味にも勝る。彼の攻撃を受けて、シヨックを受けない者は1人もいなかった。

バス停には、すでにバスが止まっていた。彼は急いで走り、ぎりぎりバスに間に合った。

朝早くのバスは空いている。社会人とかが普通、乗車しているものだが、学校行きのバスにはだれも乗らない。しかし昼になると、学校より先にあるシヨッピングモールが開店するので、おばさんが利用するシヨッピングバスに化してしまう。

いつも彼のバスの座る位置は決まっている。降車口にもっとも近い席だ。

バスが発車して40分で学校に着く。その間彼はいつも呆然として外を眺めていた。

弘忠は眠りかけていた。ウツラ、ウツラと首ががくがくになっている。

「よっ！」

弘忠はハツとなり顔を上げた。そこにいたのは学校で親友と言える、唯一の相談相手の澤井健司だ。彼の髪は妙に銀色で、顔つきは人がよさそうな顔だ。口が堅く、的確なアドバイスをしてくれるので、どんなことでも話することができる。

「あ……よう」

眠気が覚めてないのですっかり返事できなかった。

「……………テンション下げんなよ。そっぴや今日提出の英語の課題やった？」

「ああ昨日の夜に済ませた」

「そんなんだからテンション低いんだよ。まあそのおかげで助かるけど。学校着いたら写させて。なっ？」

（いつもこうやって調子のいいことばかり言うんだよ……）

「……まあいいや。いいよ」

「サンキュー」

健司はこれが普通だ。しかしこれでも成績はトップクラス。なんでもうなのか弘忠は納得がいかなかった。

「そついや今日の新聞見たかよ？」

健司が話を切り出した。

「アメリカ国交回復？」

「ちげえよ……まあ知らないならいいわ」

「あ……そう」

そのまま2人は黙り込んだ。そのまま学校に到着。そしてそこから中学校校舎まで歩く。

弘忠の通う学校は、中高一貫の私立学校で、全国的にも有名な学校だ。校長がしょっちゅう募金活動や、奉仕活動を行うので、学校の名声も高いほうだ。

健司がドアを開いた。教室に2人いた。高田清志と中村美奈だ。2人の距離は、机3つつ分開いていた。清志はうつぶせて寝ている。そして美奈は今日の予習なのか、テキストを開いてノートに一生懸命何かを書き込んでいる。

中村美奈、彼女は清廉潔白で男子に対して妙に口が少ないが、口を開けば大変かわいい笑顔で話す。その笑顔に魅了された男子はすごく多かった。弘忠もその1人。しかし、彼女がなにを考えているかはだれにも分からない。彼女は口を開くことはほとんどないため、男子は遠くから彼女を見るだけしかなかった。しかし、高田清志と弘忠に対しては特別だった。周囲の男子は、清志と弘忠に嫉妬したが、周囲との付き合いが悪い清志だけを憎んだ。ただ、数人の男子は彼と仲が良かった。そのなかに健司も数に入っている。

教室の中は耳が痛いほど静かだった。物音さえもしない。強いて言えば、美奈がノートに文字を書き込む音だ。

「……………なに、このシケてる教室？」

健司が入り口で立ち止まって言った。弘忠は健司を退けながら教室に入った。

「毎日こんなもんですが？」

清志はうつぶせの状態から顔を起こし、背伸びをしながら答えた。

「そ……そう」

健司は返事にとまどいながらカバンを自分の席に下ろした。清志はまたうつぶせた。

「ねえ、ちよつといい？」

美奈が清志に近寄り話しかける。弘忠は嫉妬し、そのまま自分の席に着いた。そして、適当に英語単語集をカバンから取り出した。ちらちらと彼女のほうを見ながら単語集に目を通す。

「……………」

ずっと清志は無言のまま。美奈は心配そうに眺め、清志の隣の席から椅子を持ってきてそれに座る。それを健司は面白がって遠くから観察し、弘忠は恨みの目で見ている。

「ねえ、今日どうしたの？具合悪いの？」

弘忠は、話をする美奈に見惚れたが、その対象が清志だと思い出し、嫉妬の恨みが目に表れていた。清志は顔を上げ、頭を自分の腕の上に乗せて答えた。

「ただ眠いだけ……あと日本政府に愛想尽きた」

「はあ？」

健司が叫んだ。美奈はなにがなんだかわからない顔で、目は見開いたまま。美奈は清志の言葉に対して質問した。

「え……それどういうこと？なんで？」

「もういいです。今のなかったことにして。話すのめんどくさい」
なんとも適当な返事だ。しかし、めんどくさがりなのは清志の性格なのでだれもこの返事に動揺しなかった。むしろ、みんなこの返事を予測していた。

こんな感じで毎日ホームルームまで弘忠は過ごしているが、妙に心地悪い。毎日毎日、美奈が清志に近づいて話しかけるのを見ているのは、弘忠にとって苦痛であった。

退路遮断

朝のホームルームを終え、みんな授業の準備を始める

「ねえ、泊君……最近調子変だけど、どうかしたの？」

美奈は弘忠に声を掛けた。美奈は手になにも所持せず、ただただ弘忠を気にしている。弘忠の顔色でも伺うようにじっと見詰めていた。

「え……え、いやそんなことないよ」

いきなり声を掛けられたせいで、弘忠は動揺した。美奈は不思議そうに弘忠の顔を眺め、自分の髪の毛をいじり始めた。

「ふうん、そう？絶対なにかあったでしょ？」

美奈は手を体の後ろで組んだ。そして首を横にかしげ、目を瞬きさせる。その目は妙に光が反射し、悲しそうな目になっている。

「……別に……」

（お前が高田に話しかけていることに毎日嫉妬していたからなんて言えるわけねえだろ）

弘忠は視線を美奈から逸らし、自分のカバンから授業道具を取り出すとした。

「そう……じゃあね」

美奈は自分の席にもどり、教科書とA4ノートのカバンから取り出した。それを机の上に置いた後、悲しげの表情のまま、女友達の所へ駆け寄った。

「ふうん」

弘忠は美奈と話ができたことに安堵感が生まれた。しかし、美奈が清志に近づく場面が頭の中を横切り、いままでの安堵感が一瞬にして消去された。弘忠はなんとなくうつぶせた……3分ぐらいしたら上から声が聞こえた。

「おい、どうした。なんで今日の朝っぱらから死んでんの」
体を起こして見上げると清志がつっ立っていた。同時に蛍光灯の光が目に入り込み、手をかざす。

「んなもんでもいいだろ？」

自分を不快にさせた元凶が笑顔で話しかけてくる。とはいえ清志に對して「どっかいけ」などと言えば、なにかあったと相手に考えさせてしまう。怒りを堪えて弘忠は返事をした。

「だっていつも朝は英語の課題なんかやってるじゃん」

清志は笑顔のまま弘忠を眺める。その笑顔には、君の考えは全てお見通し、という意味が込められているようだった。

「昨日終わらせたよ……」

（本当にムカつくやつだ……。俺の行動を観察してんじゃねえよ）
「そう……それで？私が聞きたいのはそのことではありませんせんけど？」

清志は即答した。弘忠から別の答えを催促しようとした。弘忠は何言っているのかわからないまま怒鳴った。

「はあ！？」

「中村と話して楽しかったか聞いてんの！」

清志は顔を近づけ、見開いた目を弘忠に向ける。どうやら最初の質問は「なにかあったの？」という意味だったらしい。口調はだんだん厳しくなってくる。清志は手を後ろに組んだ。美奈に続いて清志までが似たような質問をする。しかし清志は美奈と違って、質問されたらしらばづくれることはできない。なぜならその時の目が恐ろしいからだ。

弘忠は慌てふためいて、口調が乱れた。

「別に……楽しくねえよ」

「あ……楽しかったんだ。ほあ、よかったじゃん」

清志はニヤニヤしたまま弘忠の向かいにある机の上に座った。そして話を続けようという意思表示で、弘忠をじつと見下ろした。

「はあ！？なんでそうなんだよ！」

その答えを待ってましたと言わんばかりに清志が挑発的な口調で即答する。清志の唇の周りにしわが入った。

「好きなんでしょ？中村美奈が」

「んなわけねえだろ！だいたいなんでそうなるんだよ」

弘忠は席を立ち、机を叩き強がって答えたが、それが本心を表している。

「ん」とねえ。まあなんとなくかな？でも泊が中村をしよっちゅう見ていたし、実際に今日の朝ね。あ、そうそう。一昨日もなんか俺に嫉妬してたね」

清志は口元を引き締めながら笑う。

弘忠はまた怒りが溜まった。毎日の行動が隠しカメラに捕らえられているように、清志に毎日の行動を観察されている。清志の監視下にあるようで、すごく不快だった。

「そんぐらいで決め付けんな！だいたいお前も人の行動を観察してんじゃねえよ」

弘忠はうつかりと教室にひびく大声で叫んだ。教室は一瞬静まり、3秒ほどしてから弘忠は周囲の状況を把握した。

「じゃあ、そういうことでいいや、心配すんな、わしが中村にお前の本心伝えてやつから」

清志は弘忠の怒鳴り声を恐れず、平然とした顔でそう言った。これは清志の特性でもある。相手が自分より立場が上であろうと、自分が正しいと思っただことは堂々と言う。そして立場が同じものであれば、相手に対して気に掛けず、相手が自分を見失ったとしても平然な顔のままにいるのだ。

清志は机から下りて、中村のいる女子集団の方へ向かった。清志は言うことは本当に実行する。だからこそ弘忠はあせった。

「わかった、本当のこと言うから待て！」

弘忠は席を離れ、清志の肩を & amp; # 2 5 6 8 1 ; んで言った。
「好きなの？」

確認口調で清志は聞いた？そしてその時の清志の顔はいつもの顔で、目は優しい目に変化していた。

「・・・・・・うん、好きだよ・・・」

弘忠は自分の席に戻りながら答えた。清志は改めて弘忠の方を向き、笑った顔でこう言った。

「ほお、そうかそうか。じゃあ恋愛関係をがんばって作れよ。お前ならできるんだから」

弘忠にとつてこの答えは意外だった。美奈は本当に稀に見る美人だ。それでいておしとやかで優しく、頭もそこそこいい。

「え？お前、好きじゃないの？応援してくれんの？」

弘忠は驚きを隠せないままそう言った。

「うん、別にわしは女子に興味ないし、自分の恋愛よりお前の恋愛が成功して欲しいから。泊と中村は・・・なんかいい関係を築けそうだしね」

この言葉に弘忠は2重の驚きがあった。自分の恋愛より他人の恋愛を心配する人など初めて聞いた。

「好きじゃなかったんだ」

「そうだよ、俺が中村のことが好きとでも思ってたの？」

清志は笑顔で答えた。弘忠は驚きと安心の2つが心の中で混じった。弘忠は驚きのせいで清志の言葉から情報を分析できていなかった。

清志はそう言ったあと自分の席に戻った。弘忠は清志への見る目が一変した。

（意外にいいやつだな）

自己中心的に、安直に考えてしまう・・・・・・

このとき、国際情勢に動きがあった。

北朝鮮、韓国と軍事同盟締結。

頭角

弘忠は、今日の全ての授業を終えた後、清志のところへ駆けていった。自分の恋愛を話したのは清志が始めてだからだ。それに清志は勉強しないでだけで頭はいい。弘忠は清志に、恋愛相談を持ちかけようとした。

「よお高田。ちょっと相談があるんだけど……」

清志はなにか本を読んでいた。小説か、参考書か、なにを読んでいるかわからなかった。本に力バーをつけているためである。清志はジーッと弘忠の顔を見詰めた。表情が一切変わらず、なにを考えているかわからない顔だ。

「何？」

なんか怖い。

「いや、ここではちょっと……」

「どこで話す？」

清志はページを取つとくために指を本に挟んで閉じた。

「そんじゃあ……近くにある例の公園でいい？」

この学校の近くに大きく、綺麗な公園がある。公園の中央にくつろぐためのガラス張りの建物があり、中には立派な椅子と机が置いている。公園の中央から波状に木が植えてあり、そよ風が吹く時には耳の保養になる、心地よい葉っぱのせせらぎが聞こえる。地面は芝生で、座り込んでも土がつかず、話をする場所としては最適だ。しかし、今は冬。葉っぱも落ちていりし、芝生も枯れている。それはそれで味があつていいものだ。

「まあいいけど……何話すの？朝話したこと？」

このときの清志は朝の清志とまったく雰囲気違った。今回の清志は怖いというのか、紳士的というのか、なにか冷酷な感じがした。

「それはそんなわかるからいいじゃん」

清志は本のページを確認し、本を力バンの中に放り込んだ。そして

チャックを閉めてカバンを背負った。

「じゃあ行きますか」

2人は学校から出て真っ直ぐ公園に向かった。行く途中は一切お互いに口を利かず、気まずい雰囲気のまま公園の中央にあるガラス張りの建物に入り、そして椅子に座った。

「うう・・・やっぱさびいわ」

やっと清志が口を利いたかと思うと変なことを言い出した。清志は席を離れ、自販機でコーンスープを買ってきた。

「そんで、話題は？」

清志は、すぐにスープを飲み干し話を切り出した。

「あのさ・・・どうすれば中村が俺のことを好きになってくれると思う？」

弘忠は単刀直入に質問してしまった。本当は清志の恋愛話を聞きたかったのに清志の異様なオーラのせいで焦り、変なことを聞いてしまった。

「・・・はい？そんなこと自分で考えろよ」

「え？」

弘忠は間違えて質問した。しかし、その質問に対してまともに答えてくれなかったことにショックを受けた。

「他人の介入を受けて成りたった恋愛なんて、そう長く持たないよ」

清志はすこし不機嫌な顔で言った。まるで軽蔑する目になっていた。「参考だから・・・別に介入しなくていいよ」

弘忠はなんとか清志から答えを聞きだそうと必死になり、頭の中が急速に回転した。しかし、いくら頭を回しても清志の頭脳には勝てなかった。

「だ〜か〜ら〜、他人の意見を借りた恋愛は長く持たないの。それにもう一つ気になることがあるし」

「何？」

清志は急に黙り込んだ。清志が質問に対して急に黙り込むというのは珍しいことである。清志は10秒してから話し始めた。

「別にいつも通りのお前でいいじゃん。やたらにカッコつける必要なんて恋愛に必要な。それに・・・偽りの自分を好きになってくれるより、本当の自分を好きになってくれたほうがうれしいですよ？」

弘忠は、清志が恋愛に対してしっかりした考えを持っていることに驚いた。まったくの正論だが、なぜか納得いかなかった。

「中村に対してなにもするなってことか!？」

「声大きい」

思わず大声で言ってしまった。建物内には2人以外にだれもいないので、声を聞かれずにすんだ。

「いや、自分の性格を偽るなって言っただけ。とりあえずこう言っておかないと、お前たいへんなことになりそうだし・・・中村に対しては、なんらか行動してもOK」

（そんなに俺・・・性格偽るか？）

「あ・・・そうですか・・・」

しかし弘忠は美奈、好きな人に対してどのような行動を取ればいいのかがまったくわからなかった。弘忠は女子に告白されたことは数え切れないほどある。それは小学生のころからで、今も変わらない人から好かれるという体験はあるが、人を好きになるという体験は今回が初めてだ。

「まあこんな世の中で恋愛がいつまで続くか、わかんないけどね」

清志は紙コップをくしゃくしゃにしてゴミ箱に投げ捨てた。

「は？」

弘忠はきょとんとした顔をしている。

「・・・まあいいか、とりあえず・・・ってかお前、中村の行動を見てなにもわかんないの？まあお前観察力ないからわからないか」

清志はあくびしながら言った。弘忠はちょっとその理由に期待し、体を乗り出して清志に聞いた。

「え？なに、ひよっとして俺に気があったりするんの？」

清志は目を見開いて、浅くため息をついた。

「・・・・・・・・んなわけねえだろ」

弘忠はこの答えにシヨックを受けた。自分の期待とまったく逆の答えが返るとは思いもしなかった。その動揺を清志に見せないため、椅子に深く座りなおした。

「そうか・・・・・・・・ありそうなもんだがなあ」

弘忠は冗談めかして言った。

「中村の行動は観察しとけばいろいろわかるものですけどね、自分で考えてみたら？」

清志の言葉は、たまに日本語の文法がおかしくなる。大抵、一般人の場合は焦りだが、会話の流れからして焦りからではないと、弘忠は悟った。

「まあ俺の話はここまででいいや。そういえばお前は好きな人がいたりしないの？」

弘忠は、清志と話しをしても希望を持ってないと思い、話題を転換した。

「・・・・・・・・さあどうでしょうね。心理学的に考えてみて」
清志は平然と話したがよく見ると、話しを逸らしたい目をしていた。
「じゃあいたんだ。もしかしたらいるの？」

弘忠は恐る恐る聞いてみた。

「正解、今は・・・・・・・・いない・・・・・・・・かな？」

（やっぱりこいつみたいな変人でも好きな人はいるもんだな）

「へえ。どんな人が好きなの？」

「うーん、わかんないなあ。多分その好きだった女子に対して尊敬の念があったから・・・・・・・・多分異性として好きなんじゃなくて、尊敬ゆえに好きだった・・・・・・・・かな？」

弘忠はこの言葉を聞いたとき、清志から異様なオーラを感じ取った。なにか悲しさと覇気を感じた。そして清志は別世界にいるように感じた。それも、過去の歴史に・・・・

「さて、そろそろ帰ろつか。まあ泊君も尽力するように」

清志は笑顔で立ち去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2759d/>

戦争と人類の共生

2011年1月11日02時35分発行